

『満洲補充読本』と満洲児童文学の誕生

—最近の石森延男研究をめぐって—

磯田一雄*

isoda17@nifty.com

Contents

- I. 最近の石森延男満洲児童文学研究管見
- II. 満洲児童文学の背景としての満鉄附属地の教育
- III. 『満洲補充読本』——その誕生と変容——
- IV. 石森延男の満洲児童文学と満洲郷土論
- V. 『協和』に投稿された石森作品をめぐって—反軍的か軍国的か—
- VI. 石森満洲児童文学の「ヒューマニズム」と「植民地性」—最近の研究動向—

I. はじめに—最近の石森延男満洲児童文学研究管見

筆者は植民地教育＝在満日本人教育とのかかわりの視点から石森延男(1897～1987)の満洲児童文学の成立を考察したことがある¹⁾。在満日本人用の国語の副教科書である『満洲補充読本』の編纂との関係で、石森の満洲児童文学が生まれたことを指摘しているが、教科書教材の検討が中心で、実際の満洲児童文学としては、石森が満洲から帰国してから発表した長編満洲児童小説、『咲き出す少年群』(1939年)・『日本に来て』(1941年)・『スングリーの朝』(1942年)の「三部作」をかなり詳しく紹介している。しかし石森が『満洲補充読本』の編纂と並行して精力的に展開していた、満洲での14年間にわたる児童文学活動についてはほ

* 成城大学 名誉教授

1) 磯田一雄(1999)『^{みくに}皇国の姿を追って』皓星社。主要な関係箇所は第I部「石森国語の成立と満洲」の「第二章 石森延男の参加と『満洲補充読本』の改訂」、「第四章 戦中・戦後の国定国語教科書の編纂と石森延男」及び「第五章 戦時下の石森の児童文学作品と《満洲》——「ロシアびいきとナショナリズムとの間」、同書pp.42-76及びpp.102-148。

とんど触れていない。

ところが最近、その空白を補うかのように、季穎(2010)『日中児童文学交流史の研究——日本における中国児童文学及び日本児童文学における中国』風間書房・寺前君子(2014)『満洲児童文学研究』梅花女子大学博士論文、未公刊・魏晨(2014)『《満洲》童話作家・石森延男の登場——満鉄社員会機関誌『協和』における創作活動をてがかりに——』『跨境』創刊号、高麗大学校日本研究センター、など石森延男の満洲児童文学を対象とした研究に偶々接する機会を得て啓発されるところがあった。なお季穎と寺前は拙著『「皇国の姿」を迫って』を参照している。

季穎の著書は「Part 1 論文」と、「Part 2 書誌」からなるかなり包括的なもので、論文部分の第Ⅱ部「日本児童文学における中国(中国を素材とした書籍)」の第1章「古典作家における中国」には石井研堂・巖谷小波・芥川龍之介などの児童文学作家が扱われ、第2章「中国と関係が密接である作家における中国」に、第1節「山中峯太郎」と並んで、第2節「石森延男」の二人が出て来るというユニークな構成である。石森を対象とした部分は、通常の論文1篇分の24ページに過ぎないが、満洲ないし植民地児童文学の流れの中で位置づけられており、独自の石森解釈をしている。季穎の対象としている石森の満洲児童文学作品は、在満中に出された『(少年少女よみもの)まんちゅりあ 春夏の巻』(1930年)、『同秋冬の巻』(1930年)、『(第二)まんちゅりあ』(1933年)の三冊と、石森の帰国以後敗戦までに刊行された「三部作」と『マーチョ』(1944年)の4篇である。前者『まんちゅりあ』三冊の扱いはごく簡単で、石森の満洲時代の児童文学活動の扱いとしては軽いものだが、帰国後の四篇についてはかなり詳細に検討しており、また簡潔ながら石森の戦後の作品も一部言及している。なお後者の内「三部作」は、筆者が拙著で検討した個所と対象が重なっている。

寺前君子の博士論文『満洲児童文学研究』は、石森延男の満洲において開始した、かなり膨大な児童文学活動を、石森自ら創刊した同人誌を中心に最初期から詳細に考察している。同人誌の外、投稿した雑誌の作品にも触れているが、磯田・季穎とは逆に石森帰国後の作品にはほとんど言及していない。ただし「三部作」の一『咲き出す少年群』は、帰国前に満洲で新聞に連載していた『もんくー

ふおん』からの改題・改作であるが、その改作過程を詳細に比較・分析しているのは注目される。なお、付随している上下二冊からなる『満洲児童文学資料編』は、石森の創作活動に関する資料を丹念に蒐集したもので、石森研究上の利用価値が大きい。

魏晨の論文は、満洲における石森の最初期の膨大な児童文学活動の内満鉄社員会機関誌『協和』に投稿された作品の考察が中心である。『協和』の作品については寺前も触れてはいるが、正面から取り上げていないので、その意味では寺前の研究の補充ともいえよう。また魏晨は季穎・寺前と異なり拙著『「皇国の姿」を追って』には言及していない。

こうしてみると、筆者を含む四人が、あたかもそれぞれ役割分担をして研究活動を行ったかのような形になっている(一部重複はあるけれども)。これらの石森論をどう評価するかはむしろ児童文学専攻の研究者にお任せしたいが、拙著参照の有無にかかわらず、これらの研究が筆者の及びえなかった部分の資料と見解を提供してくれたことは確かである。

(「満洲」という用語について問題のあることは筆者も承知しているが、本稿ではあくまで歴史上の用語として使用する。「満洲」が「満州」かという表記上の問題については、引用する原典が「満州」の場合に限り「ママ」を付することにする。またこの用語は常に引用符を付けるべきだとも思われるが、本稿では煩わしいのでこれを省略したことをお断りしておく。)

Ⅱ. 満洲児童文学の背景としての満鉄附属地の教育

石森延男はその生涯を通じて「童話作家」であったが、同時にまず国語教師であり、生涯を通じて国語教育者・教科書編集者でもあった。彼の童話は初め教科書編集の中から生まれたものであり、戦後における童話創作も教科書編集など国語教育の仕事と並行して行われていたのである。その彼の児童文学が生まれたのが満洲、具体的には満鉄の学校のための補充教科書編纂だった。まずそ

の背景を考察しておきたい。

(1) 附屬地の教育と関東州の教育—二重教育体系と現地主義—

日露戦争後、満洲国成立以前の在満日本人は、主に租借地・関東州か、租界の一種である満鉄附屬地に住んでおり、その他の「一般地」に住む日本人は少なかった。在満日本人は広大な満洲の一部分に、へばりつくようにして生活していたのである²⁾。

満洲における教育経営は、関東州では関東都督府(のちに関東庁・関東局)、附屬地では満鉄の果たすべき役割の一環であった。一般に満洲という時は関東州と満鉄附屬地とを区別しないで使っているのが普通である。しかし両者は密接な関係があるけれども、行政的・法制的にはっきり区別されなければならない。関東州は日本の他の植民地に準じて領土並みに扱えたのに対して、附屬地は日本に特権があるものの「外国」だった。関東州はかなりの面積をもった半島で、隣接する中国領土とは独立した地域として日本人社会を囲いこみやすかったのに対し、附屬地は地域も狭く、周囲の中国人社会の大海に浮かぶ小島のようなもので、中国人や中国社会の影響を受けやすかった。関東州の教育は基本的に関東都督府が設立する「官制」の学校だったのに対し、附屬地の学校の経営者・満鉄は国策会社とはいえ一企業体だったから、当然企業の利益を射程においた、私学的な教育経営を行っていた。

附屬地の教育の特徴は一口に言って「適地主義」「適応主義」にあった。満鉄は当初より将来満鉄に役立つ人物の養成を教育に期待する傾向があった。当時の会社の当局者は草創期から「会社ノ教育方針ハ一言ニシテ之ヲ謂ヘハ適応主義ニアリト云ヒ得ル」といい、「満洲ノ土地ニ適応スル方法ヲ学校経営者ハ考究セヨ」としばしば訓令していた³⁾。附屬地の教育には文部省の支配が直接には及ばないものの、教育方針として「教育勅語を奉戴」し「国体觀念の涵養を重視する」という点では日本内地とも関東州とも変わりなかった。しかし附屬地の教育は

2) 塚瀬進(2004)『満洲の日本人』吉川弘文館、pp.46-47。

3) 『満鉄教育沿革史・草稿』(1937)南満洲鉄道株式会社地方部学務課、p.2114。

さらに「他日植民地における業務に従事して国家発展の任に当たらんとする人物の陶冶」をめざしていたのである。現地主義教育の端的な現われは小学校における「清語」(後に「支那語」、さらに「満語」と言われた中国語の教育であった。1912年に「附属地小学校規則」が改正され、高等科だけでなく尋常科でも第五学年以上で「英語」または「清語」を随意科目として教えられることになったのである。植民地に在住する日本内地人の子どもに現地語を教えることは、満洲だけの特色であって、台湾や朝鮮などでは行っていない。学校現場ではさらに満洲の地理・歴史や満洲にふさわしい唱歌などを教えることなども模索されていた。

しかし現地適応主義の教育は、なかなかその基礎が固まらなかった。特に関東州は日本領土並みの感覚で運営されていたため内地延長主義の傾向が強く、日本人小学校における中国語教育の実施も、附属地よりはるかに遅れていた。1910年8月に南満洲教育会の総会で関東都督府民政長官が、南満洲の小中学校教育で誤っているのは「南満洲ヲ重視シ過クルコト」だ、子どもたちは満洲の地名や動植物などを知りながら、肝心の母国・日本のことを何も知らないと批判したことからも、その一斑が知られるであろう⁴⁾。

(2) 現地適応主義教育と満洲独自教科書の編纂

もともと附属地では日中の接触が身近であったため、中国語を始めとして、異民族・異文化への理解を教育する必要に迫られていたのだが、これに拍車をかけたのが「対華二十一箇条要求」を契機とする排日運動の勃発であった。軍の力で抑えているので附属地内に居住する限り一応安全は保障されるにしても、これを囲む大洋から襲ってくる嵐のような運動そのものに手を出すわけには行かなかった。在満日本人教育用の補充教科書の編纂が行われるようになった背景にはこのような事情があったのである。

中国の研究者は在満日本人教育における現地主義は中国侵略をめざしたものと指摘している⁵⁾。上述のような背景を見ればそういう見方も至極当然である

4) 磯田一雄「附属地の教育」(2006)、『満鉄とは何だったのか』藤原書店、p.213-214。

5) 例えば斉紅深(1991)『東北地方教育史』遼寧大学出版社、初版、p.275(原文・中国語)。

う。しかし当時の日本側指導層は、逆に在満日本人の子どもが中国側に同化される恐れを感じていた。このことは植民地教育の初期の段階から附屬地の教育行政担当者によって行われた論議の中にたびたび現れている。例えば1914(大正3)年に渡満した幣原坦は、満洲では尋常第五学年以上に、随意科として「支那語」があることを指して、「支那語の教授は……之を授けて支那人を我等の方へ引きつける助けになれば頗る面白いけれども、其の反対に、支那の方へ引きつけられる様な傾向があってはならぬ」と注意を促している⁶⁾。「ミイラ取りがミイラになってしまう」ことを恐れたものであろう。

こういう状況下に「内地恋シヤノ教育」を打破し、「満蒙ヲ背景トシ満蒙ニ活躍シ得ル人間」の養成を強調し実行させたのが、新任の満鉄地方部学務課長のほぼたかし保々隆矣(1883~1950)だった。保々は1920年1月学務課長に就任するや、満洲の日本人は大人も子どもも衣食住のあらゆる面で内地式の生活や思考から抜け出していない。これでは日本人は満洲で発展できないとして、次々に斬新な提案をした。まず生徒の防寒着普及と戸外スポーツ特にアイススケートの奨励を呼びかけた。外遊びを促すためオーバーに補助金を支出し、中国語を必須科目にすることを提案するなど現地適応主義の教育の論議をまきおこした。

また保々は満鉄附属の教育研究所を充実し、各教科ごとに満洲特殊教材を調査研究させ、各種の満洲補充教科書を編纂することによって、附屬地の教育における「満洲特有のX」を実現させようとした。最初に編纂されたのは五年生用の地理と算術の補充教科書と四五年用の理科教科書で1921年から使用された。以下歴史や『満洲唱歌集』『満洲補充読本』など、満洲独自の正・副教科書が続々刊行された。これらの教科書は関東州でも使用されたので、1922年1月関東庁・満鉄の合同経営による教科書編輯部が南満州教育会の中に設置され、1924年度から南満洲教育会教科書編輯部という正式名称になった(以下、「教科書編輯部」と略称)。

朝鮮・台湾など他の植民地では、日本が支配した現地民族には「日本語」の教科書を始め現地編纂教科書を使用させたが、そこに移り住んだ日本内地人の子

6) 幣原坦(1916)『満洲観』東京宝文館、p.64-65。

どもには原則として内地と同じ教科目で内地の教科書を使用させていた。これに対し満洲では、中国人用の教科書だけでなく、日本人用の教科書も現地で編纂された副教科書を多数使用したのが著しい特色である。附属地教育における現地主義の展開を最も具体的に示すのは、これらの満洲で編纂された日本人用補充教科書である。理科・算術と地理の補充教科書が出来た時、保々は次のようにいっている(以下引用文は原則として現代仮名遣い・現代的表記に改めている)。

いやしくも日本人が満洲に発展しようとするならば満洲に最も適合したる生活を為し満洲に関する知識を出来るだけ多くせねばならぬ、此の見地よりして……補充教科書を編纂し……講習会を開くことになったのであります。これらの教科書は内地の国定教科書以上に重視してもらいたい⁷⁾。

中国側からすれば、これは帝国主義的侵略に見えるだろう。しかし日本人の側から見れば、これらの補充教科書を国定教科書より重視せよというのは、堅苦しい日本の教育制度の束縛から解放されることであり、まさに「自由教育」の実現であった。保々は次のようにも言っている。

日本は世界に稀なる国定教科書制度を採用しているから、北海道の児童も琉球(沖縄)、台湾の(日本内地人の)子供も同一時季に同一の事柄を教えられているから児童には不可解なる事実に対する努力に倦怠の色が見える。例えば茅屋の竹垣、蛍飛ぶ夏の夕闇など、天国の話と大差ないと満洲産の(日本内地人の)子供は思っている……同一教材のみを以て教育することは人の特異性を没却する欠陥でもある⁸⁾。

これ等の補充教科書の中で子どもたちに最も人気があったのが、国語の補充教科書『満洲補充読本』である。一つには国定教科書と違って、補充教科書は扱いが自由で、好きなように読めばよかったためらしい。『満洲補充読本』は1924年

7) 島田道弥(1935)『満洲教育史』文教社、p.278-279。

8) 保々隆矣(1932)『満洲の教育』『岩波講座教育科学』第十冊、p.8。

(大正13年)にまず「一の巻」が完成、以下「高次の巻」まで8巻が年を追って刊行された⁹⁾。しかしこうした現地適応主義の教育には、当の満鉄内部にも次のような根強い反対論があった。

近年在満邦人間の教育当局の意向は、日本の児童には出来るだけ満洲の事情を教習せしめねばならぬとして、この主義方針の許に、教科書編纂機関を創設し、専ら満洲日本人小学校特種の教科書を刊行し之を使用される傾向があり、言論界も亦之に賛同を表し、この挙を奨励して居る。／……南満州教育会の意図必ずしも悪くない。その主張にも一理の存するを認めねばならぬ。然し必ずしも達観とは申し兼ねる。蓋し在満邦人は、布哇、亜米利加で産れ日本の国籍を脱して外国人となる日本人とはワケが違う。飽くまでも忠良なる帝国臣民であり、母国の同胞と一分一点の相違の無い日本人に育て上げなければならぬ大責任を担うものは即ち南満州教育当局である。……¹⁰⁾

こういう論調は、『満洲補充読本』はじめ各種の補充教科書の編纂にも何らかの影響があったかもしれない。

Ⅲ. 『満洲補充読本』—その誕生と変容—

石森が『満洲補充読本』の編纂のために招かれて大連に渡ったのは、奇しくも先の上田恭輔の現地主義批判論が発表される少し前の1926年4月だった。『満洲補充読本』は当時すでに「三の巻」まで刊行されていたから、石森が担当ないし教材を執筆したのは、「四の巻」以降だったであろう。「四の巻」の「桃花源」、「五の巻」の「崩れた砦」などは石森の作である。

石森は教科書編輯部に着任する直前の1926年1月、「日本文学ものがたり」と「支那文学ものがたり」からなる、少年少女文学物語『慕わしき人々』を刊行していた。

9) 磯田一雄ほか編(2000)『在満日本人用教科書集成』柏書房、1・2巻を参照。

10) 上田恭輔(満鉄秘書役)『満洲日本人小学校使用の教科書編纂に就て』(1926)『南満教育』大正15年7月号、p.20。

その中に「桃花源」がある。これが「四の巻」の「桃花源」の源になったのであろう。石森は『満洲補充読本』の編纂過程で教材を執筆することが、彼の満洲児童文学の発端になったと見られるが、実はその基礎が既に渡満前にあったといえよう。また「崩れた砦」は「五の巻」と前後して刊行された『帆』(後述)に同名の作品がある。石森は戦後この当時のことを次のように回想している¹¹⁾。

満洲のあちこちを見ていると 大陸生まれの子どもたちは縁側を知らない 井戸を知らない たんぼも 田うえ ゆかた 縁日 竹林一季節も 風物も知っていない。生活に根をはっていない教材では 子どもたちの感性知性を育てることは難しい (中略) 気の向くままに書いては矢沢さんに見てもらった。矢沢さんがうなずいてくれたので自信が付き 暇があれば教材探しの旅をした。……満洲をふるさとにした子どもたちはこうした身近な教材にひかれて心から迎えてくれた。

これは当時「満洲」で在満日本人小学校教育の関係者が口々に言っていたこととほとんど同じである。また「矢沢さん」とあるのは、石森の母校・東京高等師範学校(現・筑波大学)の先輩であり、教科書編集部でも先輩だった矢沢邦彦(1883~?)のことで、彼が石森を育てていたような観がある。矢沢は当時教科書編集部国語科主査で、後に石森らと文芸同人誌『童心行』を主宰している。『満洲補充読本』は1930年に「高二の巻」まで全12巻が完成し、翌1931年から改訂版が出されることになった。そこで「一の巻」の初版と、石森が携わった第一次改訂版を比べて見てみよう。『満洲補充読本 一の巻』初版(1924年、一学年用)を見ると、当時の中国の教科書と同じサイズの四六版で、課数は11、37ページという小型の教科書で、その体裁がまさに「満洲」的(=中国的)である。冒頭の教材は次のようである(タイトルは教科書原文、説明は筆者による)。

- 一 デムカヘ・・・満洲独特の特徴のある汽車の鐘の音、ホームに中国服を着た人がある挿絵。
- 二 ハタケ・・・満洲特産の高粱(中国語読み)と大豆——身近に見た感じの挿絵。

11) 石森延男(1979)『満洲補充読本の誕生』、『満洲補充読本 復刻版内容見本』パンフレット、国書刊行会。

- 三 レングワ・・・畑の中の窯で焼いた煉瓦を一輪車で運ぶ——いかにも満洲的風景。
- 四 ユフヒ・・・「満洲」の長い夕焼けは印象的である。表紙の絵はこの情景と思われる。
- 五 ユフガタ・・・島木赤彦作。「カオリヤン」(「高粱」の中国語読み)と「ヒロイ」で「満洲色」を出す。

第一次改訂版(1931年)では当時の日本の教科書や雑誌と同じ菊版となり、課数は20とほぼ倍増、冒頭は次のように変わっている(タイトルは教科書原文、説明は筆者による)。

- 一 マンシウ・・・満洲の自然美と子どもとを対比している(カラー挿絵)。
- 二 サカミチ・・・大連の街を思わせる都会的な風景(カラー挿絵)。
- 三 アソビゴト・・・日本の子どもがどこでもやっていた遊び。
- 四 ハタケ・・・初版の「二」と同文。「カオリヤン」が「コウリヤン」と日本語読みになり、挿絵がやや遠くから見た風景になる(車窓風景か)。
- 五 エンソク・・・段差のある表記に特色があるが、満州らしいところは見られない。

なお「一の巻」の「デムカへ」「ユフガタ」はそれぞれ八・九課に再録されている。全体としてみると、この第一次改訂版(以下、改訂版)は、石森の執筆したとみられる教材が大幅に増加すると同時に、質的にも大きな変化をしている。初版本は一～五の課を見ただけでも愚直なまでに満洲の土の匂いを盛り込もうとしていることが分る。それがこの改訂版では、満洲の現地を思わず教材の外に、さりげなく日本人が中心となり、進んでは日本の国家意識ないし国威発揚を狙ったような教材が出て来ている。現地の教材はかなりあるのだが、現地の民族色を薄めると同時に、大連や満鉄附属地の、日本内地とあまり変わらない日常生活や、現地と関わりのない一般的な話題、さらには明確に日本的なものを打ち出した教材まで入れられているのである。

また教材の数が増えたにもかかわらず「レングワ」のような土着性の強い教材

が省かれ、「シロイコブタ」といういかにも中国的な民話が「キコリトオノ」という寓話に替えられている。挿絵でも現地民(中国人)らしい人物が大幅に減っている。

IV. 『満洲補充読本』の改訂と満洲郷土論

石森延男は、この「一の巻」の第一次改訂版について大連奨学会で編纂趣旨を次のように説明し、その中で「満洲郷土論」を展開している¹²⁾。

文部省編纂にかゝる国語読本は、主として日本内地の風物事情を記述してあるので、在満児童には、理会上困難なものが少くない。満蒙に関する材料はあるにはあるが、極めて概念的で分量も少ない。この国語学習上の不便を補はんがために、満洲補充読本は編纂されたのである。これで満洲補充読本は、なるべく満蒙の風物事情を記することにつとめ、在満児童の生活に親密な新鮮な材料を蒐集し、主として満蒙支那を諒解せしめ且つ郷土観念を培ひ、なほ満洲初等国語教育をして一層充実にしめんことを目的としたものである。

その上で「経には郷土愛着の精神を織り、緯には読み方科(の)本質の流をくみ入れた」ところにこの改訂の狙いがあるという¹³⁾。その趣旨がもっとも明白に出ているのが冒頭の教材「マンシウ」と、それに続く石森の説明であろう。

一 マンシウ
ソラ ノ ウツクシイ マンシウ。
ヒロピロ ト シタ マンシウ。
ワタケシ ドモ ハ
マンシウ ノ コドモ デス。

12) 石森延男(1931~1932)「改訂満洲補充読本一の巻について」、『南満教育』昭和6年9月号~昭和7年1月号に連載

13) 石森延男(1931)「改訂満洲補充読本「一の巻」について(一)」、『南満教育』昭和6年9月号、p.22。

われわれの住む土地、生まれた土地の自然をおもひ、自然を愛することが、郷土教育の初めであり、終りであると考えます。この課は、郷土愛着からさらにわれわれの希望、覚悟、反省にいたる道を示しているのです。

「ソラノ ウツクシイ」は、空気の乾燥によって、埃及と同じような現象なのです。夜の空、星、曙、昼の高い空、夕やけの空、見わたしのきく空なのです。……

「ヒロピロ ト シタ」は、野原をさしていったのです。野原、畑、どこを見てもさえぎるものゝない平野。

一は天上の美をたゞえ、一は、地上の宏を暗示しています。「ワタクシドモ ハマンシウ ノ コドモ」とうけてきますと、当然どんな子供だろうという推理がはたらくのです。これを満洲のものは、すべて美しい。私共は満洲の子供だ。だから私たちは美しい。こんな三段論法風な推理が働きはしないでしょうか。……

「マンシュウ ノ コドモ」でできてしまったら、おちつかない文になります。……「コドモ デス」これで自覚観念を鮮明にひゞかせます。¹⁴⁾

更に続けて石森は、短い文の中に「マンシウ」を三度もくり返したのは「親熟せしむる上に効果的」だからだと付言している。「満洲」を「郷土として愛する」ことの強調が重要である。

ただしその満洲は「人文抜きの自然」である。かつて人間の住んだことがなく、人文的遺跡や風俗・習慣・民謡・民話などが皆無な土地であるかのようにみなして、そこに自分たち日本人のものをこれから形成して行こうというのである。実はこの石森独特の「郷土愛」は、石森が満洲について間もなく思い浮かんだことであり、それが彼の児童文学活動の不可分の関係にあったのだが、この点は次節で述べよう。

次にこの改訂版では、大連や満鉄附属地の中の日本内地とそれほど変わらないような日常生活や、さらに満洲の現地と直接関わりのない一般的な教材が多くなっている。初版では「コトリ」くらいだったが、改訂版では「アソビゴト」「エンソク」「ランニング」「ガクカウアソビ」「クダモノ」などかなり多い。さらに明確に日本的なものが打ち出された教材としては、「ラヂオ」では「トウキャウノコエガトンデクル」(東京の声が飛んでくる)というように、直接日本内地とのつながってい

14) 石森延男(1931)「改訂満洲補充読本「一の巻」について(一)」『南満教育』昭和6年9月号p.23-24。

ることを意識させる教材が入っている。

総じてこの改訂版では、初版に強かった「異郷に住んでいる」という感じをかなり弱めているといえよう。つまり初版本より(矢沢邦彦の発案ではないかと思われる)「支那教材」を減らして、むしろ日本的な教材が増加している。改訂版で教材が倍増したのは、この異郷性を感じさせない日常生活教材の増加が最大の原因なのである。これが先の上田のような現地主義反対論に対応するものであるかどうかは今のところ確認できない。

魏晨は「日本人の支配民族という立場を保ち、尚且つ《満洲》の子供を《満洲》に根付かせ、そしてより多くの〈内地人〉を「満洲」に定住させようとする戦略には、日本語教育、そして日本語児童文学が必要とされた」¹⁵⁾と述べている。これは「満洲にふさわしい国語教育、そして満洲児童文学が必要とされた」というべきであろうが、まさにこの『満洲補充読本』のような在満日本人教育の施策がそれに当たるのではあるまいか。それは明らかに、満鉄という国策会社を通しての、明確な「国策」の意思と結びついて実現されているのである。

「一の巻」だけに限らず、『満洲補充読本』の改訂にはこうした態度が一貫して反映しているが、それと同時に見られるもう一つの特徴は、中国(漢民族)的色彩の弱化に対して、ロシアの比重がかなり大きく、むしろ強化されたような印象を受けることである。例えば、挿絵から中国人らしい人物を消したり、爆竹を鳴らす場面で「シナノオシャウガツ」という説明を省いたり、中国的民話を削除したりしている反面、中国系の現地民と交流する教材はないのに、「マーシャさん」という隣のロシア人母子との交流教材があるし、新たに「ロシャパン」という、ロシア人が大連の街角でパンを売っている風景の教材が「一の巻」に入っている。冬の満洲に不可欠な暖房装置にしても、もっぱらロシア式のペチカが出てくるのである。

ところで、「満洲」を「郷土」にせよという論議は、当時「満洲」に生まれ育った日本人の世代が、自分の故郷がどこなのかわからなくなっている、という深刻な問題がその後提起されていたことを予想していたかのようなようである。作家・秋原勝二

15) 魏晨(2014)『《満洲》童話作家・石森延男の登場』『跨境』創刊号、p.124。

は「満洲」における教育が、「教科書は文部省発行の内地のものそのまゝ」など日本一辺倒であることを批判して、「満洲にいて満洲知らず日本人にして日本知らず、一体私らは何なのか、その無性格ぶりにはおどろいてしまう」と訴えている。江原鉄平はこれに呼応するかのように、やはり次のように自分の受けた教育を批判している。

我々の先輩達は、(中略)無責任にもわれわれに日本内地の教育ばかり授けて置いて、今になってもうそろそろ満洲に愛着を持っている筈の第二世が満洲文学を生んでもよい頃だという。私もその第二世の一人だが、満洲に対して一向に愛着を感じて居らぬのである¹⁶⁾。

秋原は1913年生れ、江原は1909年生まれだから、まだ現地主義が実施に移される前、『満洲補充読本』などが編纂される前に(あるいは編纂されつつあったが間に合わない時期に)在満日本人小学校を卒業したことになる。満洲児童文学に接することも多分なかったであろう。『満洲補充読本』は子どもたちに歓迎されていた。こういうものに出会っていたら「故郷喪失」感が多少とも救われたのかもしれない。「文部省発行の内地のものそのまゝ」の国定教科書を使用することは最後まで変わらなかったし、圧倒的に多数の中国人の先住している土地に、あたかも無主の土地であるかの如く、自然のみを郷土にしようとする、根本的な矛盾は変わらないけれども。

V. 石森延男の満洲児童文学における満洲郷土論

大連に渡った石森は、補充教科書の編纂の仕事のかたわら、様々な雑誌や新聞に精力的に投稿を開始した。主な投稿先は南満州教育会機関誌『南満教育』と

16) 秋原勝二(1937)「故郷喪失」『満洲日日新聞』昭和12年7月29～31日付、及び江原鉄平(1937)「満洲文学と満洲生れのこと」『満洲日日新聞・夕刊』昭和12年8月18～21日付。ともに橋本雄一「[満洲]の日本人作家による「故郷喪失」論」(1996)『越境する視線——とらえ直すアジア・太平洋』せらび書房、pp.75-76より再引用。

満鉄社員会機関誌『協和』、『満洲日日新聞』・『満洲日報』などだが、重要なのは石森が在満日本人の子どもたちのための児童文学雑誌を自力で創刊し、あるいは文藝同人誌を主宰していたことである。関係した主宰誌と同人誌、及び単行本は、石森が教科書編集部に在籍していた、1932年11月までの在満前半期約6年間のものだけでも以下のように多数ある¹⁷⁾。

満洲中等学生読物『帆』 学期毎に年3回発行。1927年1月～1928年12月。全6冊。

小学生よみもの『満洲野』 季刊。上学年用と下学年用。1928年6月～1929年2月。全8冊。

『ます野』 小学生用リーフレット、月刊、第4号から初級用・中級用・上級用の三分冊。1929年5月～1930年3月。全24冊。

『童心行』 文藝同人誌。月刊。1930年1月～1934年6月。全44冊。

『新童話』 童話同人誌。月刊。1930年5月創刊。1932年9月『郷土満洲』と改題するが同年11月終刊(この流れを継いだ『童話作品』を1935年4月刊行するも、終刊日不明)。

『まんちゅりあ』 「春夏の巻」「秋冬の巻」の2冊。1930年5月。『ます野』に掲載された作品30冊分を収録。

『第二まんちゅりあ』 「小学一二年生用」「小学四五年生用」の2巻。1933年3月。

以上の外に、石森は東京で発行されていた千葉県三らを同人とする童話雑誌『童話文学』(月刊)に参加、1929年11月初投稿、1930年11月同人となる。1931年11月同誌休刊、35年11月『児童文学』と改題して復刊される。また童話集『どんつき』を1931年に刊行している。

最初に創刊した『帆』は、石森が1926年4月教科書編集部に着任してからわずか半年ほど後に、早くも満洲の中等学校生徒のための読物雑誌として刊行することを思い立ったことになる。『満洲補充読本』のいわば中学生版を目指したのであろう。『帆』の発刊動機は、「郷土愛」「生活愛」「読書愛」の三つを培うためである、と石森はいう。ここに『満洲補充読本』の編纂目的に通ずるような論議が現れている。

17) 寺前君子博論(2014)『満洲児童文学研究 資料編 上』の「資料5 石森延男著作目録」による。

その第一は満洲に対する「郷土愛」だが、これについて石森は次のように述べている(以下引用文は現代仮名遣いに変更)¹⁸⁾。

……近代移民の多くは、打算瞑想に溺れ黄金礼賛の実証論者であった。そのために、我が国の植民地には、忌むべき植民地気分が発酵している。我が満洲は、果たしてこの忌むべき気分を満たされているかどうか。……私は、次の三項目によって、満洲に於ける郷土愛を若人たちに培うことができると信じる。

(一)は、満洲に関する自然科学の研究。……

(二)は、満洲における自然美の研究。……

(三)は、思いきり原始的素朴性にたちかえる。そこには、満洲に主材を得た、口碑も伝説も民謡も生れるであろう。要は、熱である。わが土地を想う熱の強さである。

「満洲に主材を得た 口碑も伝説も民謡も生れるであろう」とは、満洲には在満日本人の親しむべき、既存の口碑・伝説・民謡はこれまで存在しないということであろう。これは日本内地では考えられないことである。口碑や伝説や民謡は、若い世代が生まれ育った土地のものを伝承するのが常識である。ところが「満洲」ではそれがこれから「生れる」のだという。日本人から生れるのだから、それは当然日本的なものになるほかないだろう。つまりその土地の先住民族のそれであってはならない、それに同化されてはならないということであろう。

これは先の上田の「在満邦人は、布哇、亜米利加で産れ日本の国籍を脱して外国人となる日本人とはワケが違う。飽くまでも忠良なる帝国臣民であり、母国の同胞と一分一点の相違の無い日本人に育て上げなければならない」に呼応するものではなかろうか。上田の論は石森のこの論に先立つこと約4か月であり、掲載誌『南満教育』は満洲の教育関係者には深い関係のある雑誌であった。

『帆』を三巻まで編纂した石森は、一年後に第四巻を『満洲野郷土読本』という題で編纂した折にも、その刊行の意義を「国語学習の道を縦に、郷土愛の培養を

18) 石森延男(1926)「郷土愛、生活愛、読書愛 満洲中等学生読物《帆》の発刊動機について(上)」、『満洲日日新聞』大正15年11月9日付。寺前君子博論(2014)『満洲児童文学研究』p.88-89より再引用。

横にして織りあげた」と言っている。『満洲補充読本 一の巻』の改訂より三年前のことである。石森によれば、満洲は郷土といっても日本内地でいうのとは「その心持ちはちがう」。それは満洲は異民族・異文化の地で、(日本人にとっては)伝説や口碑などの点では「寂しい」からである。でも満洲で生まれ育つ子どもに親にもやはり「郷土」は必要だ。幸い満洲には「内地に見られない自然美……天然愛がある」。これは民族や人種を越えた「力」であって、「ここに住むべき郷土は暖かく広い」というのである¹⁹⁾。

ここで満洲が「寂しい」とは伝説や口碑(あるいは民謡)などが現地民族のものばかりで日本人にとっては寂しいということである。つまり日本人(の子ども)にとって満洲は、人文の点では異郷だが自然の点では郷土だということになる。現地土着の中国人や中国文化・社会とは一定の距離をおくが、その風物や自然には大いに親しみを感ずるというのである。

さらにさかのぼれば、石森の満洲の自然賛美は渡満以来のものである。初めて満洲の土を踏んだ時の印象を、石森はこう述べている²⁰⁾。

満洲の自然は殺風景だと人はいう。そこに住む人々はすさんでいるという。……しかし、一たび、この満洲に足をおろした時、この言葉は何の力もない空虚なことを知って、まあよかったと思った。どうだ。透明な空気を透してひろげられた曠野雲の影をうけて紫紅色(パープル)に輝く山の肌。河か路、どちらともつかない遠白き路、鷹揚にかけまわる群雀 内地ではみられない快明と晴朗と広闊とがただよっている。

いずれにせよ、満洲にいても日本人の子どもはまず精神において日本の子どもとしての自覚を持つ、ということをお前提にした上で「満洲は郷土」なのである。この態度は石森に限らず、当時満洲に居住していた大部分の日本人にも通ずる心情だったのであるまいか。

石森の郷土論には「自然」はあるけれどもそこに住んで営々と歴史を作って来た先住民である(主として)中国人への視点が抜け落ちている。植民地性の郷土

19) 石森延男(1928)『満洲野郷土読本』を編みあげるまで、『南満教育』昭和3年1月号、p.67。

20) 『満洲日日新聞』大正15年11月9日付、前掲寺前博論(2014)『満洲児童文学研究』より再引用。

論たるゆえんだといえよう。だが、これは石森だけではない。満洲は「自然」としては郷土であっても、「人文」の点では郷土ではない、あるいは郷土にしてはならないというのが当時の満洲郷土論の共通項と言っている²¹⁾。

日本人は「満洲国」の中核を担うのだが、それだけに「大和」という郷土を忘れてはならないと同時に、「夫婦別姓」のような、大和文化を毒する要素が満洲の「人文」にはあるとされたからである。こういう毒素に感染すると、「ミイラ取りがミイラに」なってしまふことが恐れられたのである。石森の作品はヒューマニズム＝人間的な善意に満ちていると評価される面もあるが、このような「植民地主義」が内在していることも認めねばなるまい。

ところで『満洲野郷土読本』を編みあげるまでの中で石森は、「ロシア人、支那人などの外国人と多く接しなければならぬ満洲の人々は、内地の人々よりは、一層に国際的思想に目ざめねばならない。日本の精神を自覚してゐなければならぬ」といっている²²⁾。満洲における多くの民族のうち人口比で90%以上を占める中国人をさておき、1%にも満たない(白系)ロシア人を先に立てている。『満洲補充読本』でも初版では「支那教材」が多かったが、改訂版以後はむしろロシア人の出て来る教材の方が目立つ。帰国後に刊行された満洲を対象とした児童文学『咲き出す少年群』『日本に来て』『スングリーの朝』『マーチョ』のどれにもロシア人に対する思い入れが強く表れている。

これは石森が常時大連に居住していたことと関係があるかもしれない。大連はロシアの建設した都市でロシア的色彩が強かったと同時に、日本への窓口で桜も咲くなど温暖であり行政的にも日本の領土感覚があった。奉天(瀋陽)や新京(長春)のように、附属地(日本人居住区)に隣接する中国人街がもともと存在しない地域で、人口もほぼ四分の一が日本人だった。在満日本人の中には大連とハルビンで過ごした人が多い。そして大連・ハルビンの日本人の体験は「中国体験」よりはむしろ「ロシア体験」だったとさえいえるかもしれない。特に三万人ものロシア人がいたといわれるハルビンではそうだったであろう。しかし圧倒的多数

21) 磯田一雄(2006)「在満日本人教育におけるアイデンティティ論——満洲郷土論の意味を中心に」『東アジア研究』第45号、大阪経済法科大学アジア研究所、特にp.46以下。

22) 石森延男(1928)『満洲野郷土読本』を編みあげるまで、『南満教育』昭和3年1月号、p.70。

の漢民族で充たされた満洲全体で見れば「ひとにぎりのロシア人などは大海の藻屑にすぎなかった」のである²³⁾。

VI. 『協和』に投稿された石森の初期満洲児童文学

—反軍的か軍国的か—

石森の児童文学者としての誕生と成長は、主宰誌・同人誌での作品発表を中心にして行われたのであるが、同時に石森は現地の雑誌や新聞に投稿もしていた。『南満教育』『満洲日日新聞』などには論考を投稿しているが、児童文学作品としては満鉄社員会の機関誌『協和』にも投稿していた。魏晨によれば、石森は『協和』に1928年8月4日から1932年8月1日まで34回にわたり投稿しており、「1928年—1929年、(『協和』の)児童向けの内容はほぼ石森延男の童話で埋め尽くされてしまうほど」だったという²⁴⁾。

ただし、石森が『協和』に寄稿したのは、ほとんど九・一八以前のこと(1931年8月まで)で、その後「満洲国」建国後にわずか2篇——「五月祭は」「ラヂオプレイ蟬」(放送劇か)を寄稿しただけである。特に1931年9月—1932年4月の8か月間、つまり満洲事変～満洲国建国に至る時期には、比類のない健筆の石森が一篇も寄せていないのが目につく。これには『協和』側の事情もあったかもしれないが、主として石森側の事情——当時『童話文学』や『新童話』で多忙だったため——ではなかろうか。単なる投稿誌と、同人誌や主宰誌とでは、入れ込み方が違って当然であろう。また石森が『協和』に盛んに投稿していた時期は、彼が盛んに同人誌に投稿していた時期と重なっている。その間の創作意識の変化は当然同時に投稿していた『協和』にも現れていただろう。しかしその「変化」を主導したものは、

23) 小峰和夫(1991)『満洲——起源・植民・覇権——』お茶の水書房、p.282。

24) 魏晨(2014)『満洲』童話作家・石森延男の登場』『跨境』創刊号、p.130。なおp.137の「表3『協和』に発表した石森延男の童話作品」には、1931. 5.15「満洲童話 石の寝床」が重複しているが、1931. 6.15「グレート大連」が抜けているので、投稿総回数には変わりがない。寺前君子博論(2014)『満洲児童文学研究・資料編・上』「石森延男著作目録」資料6『協和』における石森延男の著述」参照。

むしろ石森の主宰した『新童話』や同人誌『童話文学』などを通じてではなかっただろうか。この点は今後更なる研究によって検証されることを希望したい。

興味深いのは、『協和』は石森に反軍反戦の態度を表明する機会を与えた」と魏晨が指摘していることである。「反軍童話の継承」ともいっている²⁵⁾。これは今までにない石森評価だといえよう。その例として挙げられている「MARCH」や「窓が明いた」などは、まさに大正末期の日本の軍国主義的教育ないしは、中等学校の軍事教練をめぐる状況を写したものである。当時「反軍思想」が『赤い鳥』の同人の間にあり、石森もこれを「継承」したというのである。石森は北原白秋の『赤い鳥』を高く買い、『少年倶楽部』のような講談社文化に対して否定的な態度を取ったとされている。

『赤い鳥』に依った児童文学者の中で、例えば芥川龍之介は「左翼・反軍的」な自説を主張しており、実際に軍の検閲により訂正・加筆・削除を余儀なくされた作品も多数あるという。だが石森にそのように明白な反軍的思想傾向があっただろうか。石森は1924年8月から1926年春まで香川師範学校の教師だったが、まさにその間、師範学校での軍事教育が1925年4月から実施になった。担当したのは現役将校で、しかも学校内での軍事教育はいたずらに精神面を強調するだけで内容の近代化に乏しかったという²⁶⁾。石森も教師としての立場から、この軍事教育に関しては、かなり敏感になっていてもおかしくない。

わずかに二篇にせよ石森がこうした作品を書く気になったのは、満洲なら軍の検閲のないこと、あるいは満鉄の自由な雰囲気のお蔭だったということがいえるのかもしれない。だがそういう作品が「MARCH」と「窓が明いた」だけだとすれば、石森が「反軍童話」を「継承」したとまでいえるだろうか。石森はこれに類するような作品をその後書いているかどうかなど、もう少し幅広い検討が必要であろう²⁷⁾。

25) 魏晨(2014)「『満洲』童話作家・石森延男の登場」『跨境』創刊号、pp.130-133。

26) 「学校内の軍事教育」(1971)『日本近代教育史事典』平凡社、p.568

27) 石森編纂の『満洲文庫』文学篇『満洲新童話集』(1935年5月)に収録した平方久直「軍人の子」が憲兵隊から「反軍思想」とされ『満洲文庫』全体が発禁処分になり石森も取調を受けたことがある。寺前君子博論(2014)『満洲児童文学研究』第八章「平方久直作『軍人の子』と『満洲文庫』発禁問題」参照。

いっぽう石森は「反軍思想」とはむしろ正反対の軍事色の強い作品も書いている。寺前君子によると、石森が主宰していた『新童話』21号(1932年2月)は学齢別の三分冊(初級用・中級用・上級用)となったが、この頃から収録作品に「満洲色が濃くなり、戦時色も強くなっている」という。例えば「初級用」には「ハタノジラウ」の筆名で次のような童詩を載せている²⁸⁾。

タノミマス

日ノマル/日ノマル/フリマシタ/ヘイタイサン モ フリマシタ/バンザイ/バンザイ/フリマシタ

オクチ ヘ/オクチ ヘ/イキマシタ/ヘイタイ サン ハ/イキマシタ/ゲンキ デ/ゲンキ デ/イキマシタ

サヨナラ/サヨナラ/イヒマシタ/ヘイタイ サン モ/イヒマシタ/シツカリ/シツカリ/タノミマス

は

中級用には「こんばんは」という、寒夜に北満チチハルの兵士を思いやる童詩があるが省略する。上級用にはこういう童詩が掲載されている。

氷の空

氷の空を/爆撃機が/ま一文字に/うなつてくる/なんていい/ひびきだ

地べたはふるへる/あの爆音に/僕もぞくぞく/嬉しいよ。/すばらしい/怪鳥だよ。

日光の中を/つばさをはつて/日本のしるしだ/日の丸だ。/どうだい/いいだろ。

28) 寺前君子博論(2014)『満洲児童文学研究』p.124-125より再引用。童詩は原文通り。

これらは発表された時期から見て、「満洲事変」の影響があるように思われる。これらの童詩は先の『協和』の二作品とは対照的なように見える。寺前は「石森にとっての満洲風景には、当り前のように、軍隊の存在があり、それは石森にとって《御国を守る》讃えるべき存在であったということはいえるだろう」と指摘している²⁹⁾。だが石森には外にも軍隊の出て来る作品が多少あるけれども、それを書き続けたようには見えない。してみると反軍主義とか軍国主義とかいう枠組みは、石森の思想を捉えるのに有効であるとは思えないのである。むしろその時代の「世相の反映」とみたほうがいいのではなかろうか。

大正デモクラシーの流れのなか、日本でも平和ムードと軍縮気運が広がり、大正末年から昭和初年にかけて(石森が「MARCH」などを執筆した前後の時代=引用者註)、世間には「軍人嫌い」がはやった(幣原喜重郎『外交五十年史』中公文庫)。ところが陸軍は猛然と巻き返しを謀り、やがて1931年柳条湖事件・満洲事変を起こす。……軍縮支持の東京朝日は軍には批判的で、距離を置いてきたが、部数減が放っておけなくなると、読者から拠金を募り、軍用機献納運動を開始、劣勢を挽回して行った³⁰⁾。

石森作品にはこうした世の中の風潮の変化が「写生」的手法によって反映しているのではないだろうか？

VII. 石森満洲児童文学におけるヒューマニズムと植民地性

—最近の研究動向

それでは石森の児童文学の基本思想はどこになるのだろうか。季頰は「石森延男の満洲に関する作品はヒューマニズムと植民地主義の二面性を持っている」と明確に指摘している。「石森延男の満洲児童文学は善意あふれるヒューマニステ

29) 寺前君子博論(2014)『満洲児童文学研究』、p.110。

30) 神保太郎(2014)『メディア批評 第82回』、『世界』2014年10月号、岩波書店、p.58。

イックなものと言えるであろう。／しかし、石森延男は日本が満洲を植民地として占領する正当性を疑うことなく、国語教育と児童文学の創作に精力を傾けた。彼の戦前の満洲についての児童文学作品は当時の日本の国策と一致するもので、植民地主義的なものに他ならない」というのである³¹⁾。これは具体的な作品の検討を通しての論述の結果として述べられており、説得力がある。

季穎の石森観を援用すれば、『協和』に載せられた石森の作品「MARCH」や「窓を明けて」などは、「反戦反軍」というより、登場人物に対する共感という彼のヒューマンステイックな側面が強く出ている作品と見たほうがよいのではないか。またこれらは満洲ではなく日本内地の話であり、そもそも満洲児童文学ではないのだから、植民地性が見られなくてもおかしくない。

いっぽう「タノミマス」「こんばんは」「氷の空」などの童詩は、「植民地性に抵抗はできなかった」ことの反映と見られよう。これが石森の作品の中に相反する面——矛盾する面が出て来る所以ではなかろうか。石森の中で「ヒューマンイズム」と「植民地性」とは微妙にバランスを取っているのだが、どちらかの面がより強く出る時があるともいえよう。

寺前は石森の文学行為を検証する中で、植民地性にかかわる疑問をいくつも出している。例えば『帆』の創刊号に発表した「満洲スケッチ——大山坑」という作品については、坑道で働く苦力の描写に対する、「苦力の多くは山東省から出稼ぎにきた貧しい農民である。彼らの背景である貧困や日本置ける搾取されている統治下に状況には石森はまったく触れていない。むしろ、これらの背景に踏みこもうとはしないで、『地下に働く者』と『地上で働く者』との差異にすりかえている」という批判をしている。また「石森が取り上げたのは、満洲の良さのみで、満洲の暗部、つまり日本人と中国人の生活の格差や置かれていた状況の相違などは描かなかった」と指摘している³²⁾。これはとりもなおさず、季穎のいう「植民地性(主義)」の問題につながるであろう。季穎は「石森延男の中国(石森の表現では満洲)に関する作品は在満日本人社会を中心とするもので、中国人のイメージが希薄である」という。これはまさに第一次改訂版以後の『満洲補充読本』の教材の

31) 季穎(2010)『日中児童文学交流史の研究』、p.217。

32) 寺前君子博論(2014)『満洲児童文学研究』、pp.100-101及びp.116。

様相にもかなり符合するように思われる。季穎の指摘するように、これらの教材では、石森は日本人については詳しく書いていても、中国人を理解して、深みに届くような書き方はしていないといえよう。

しかし季穎は石森の満洲児童文学作品を「ヒューマニティーと植民地主義の混合物」とはしているが、同時に「……時代と社会に制限された限界性はあるが、在満日本人児童の生活と世界を如実に反映し、その時代のありさまを記録する歴史的価値がある作品である」と評価している³³⁾。中国人児童の生活と世界に石森はあまり踏み込んでいなかったとしても、在満日本人児童の生活と世界を如実に反映していれば、それだけでも「歴史的価値」があるということであろう。

植民地主義に囲い込まれたヒューマニズムという石森満洲児童文学の限界は、当時の良心的な日本人の限界だったのではないか。だからこそ石森の作品は日本人に幅広く受け入れられてきたのだともいえよう。してみるとこれは石森の満洲児童文学の分析概念に留まらず、日本の植民地における人間性や人間関係を貫く基本的な問題ではないかと思われる。今後若き研究者の間でこの問題が一層深められることを希望したい(本文中敬称を省略したことをお断りしておく)。

33) 季穎(2010)『日中児童文学交流史の研究』、p.218。

참고문헌

- 季穎(2010)『日中児童文学交流史の研究—日本における中国児童文学及び日本児童文学における中国』、風間書房
- 寺前君子(2014)『満洲児童文学研究』、梅花女子大学博士論文・未公開
- 魏晨(2014)『《満洲》童話作家・石森延男の登場』、『跨境』創刊号
- 幣原坦(2016)『満洲観』、東京宝文館
- 南満洲鉄道株式会社地方部学務課(1937)『満鉄教育沿革史(草稿)』、『満洲国』教育史研究会『満洲・満洲国』教育史料集成』第16巻所収、エム・ティ出版、1993年
- 南満洲鉄道株式会社地方部残務整理委員会(1939)『満鉄附属地経営沿革全史』(全三巻)、南満洲鉄道株式会社
- 公主嶺小学校同窓会編(1987)『満洲公主嶺—過ぎし四〇年の記録』
- 齊紅深主編(1991)『東北地方教育史』遼寧大学出版社(中文)
- 野村章(1995)『満洲・満洲国』教育研究序説』エムティ出版
- 『別冊・環⑫ 満鉄とは何だったのか』藤原書店、2006年11月
- 竹中憲一(2000)『満州』における教育の基礎的研究・第4巻・日本人教育』、柏書房
- 磯田一雄・竹中憲一・槻木瑞生・金美花編(2000)『在満日本人用教科書集成』(全十巻)、柏書房
- 磯田一雄(1999)『^{みくに}皇国の姿』を追って—教科書に見る植民地教育文化史』、皓星社
- 磯田一雄(1999)『『のらくろ』と『スガリー』の朝』—戦時下の児童文化に見る『満洲』、『成城文芸』第166号、成城大学文芸学部
- 磯田一雄(2006)『在満日本人教育におけるアイデンティティ論—満洲郷土論の意味を中心に』、『東アジア研究』第45号、大阪経済法科大学アジア研究所
- 小峰和夫(1991)『満洲(マンチュリア)—起源・植民・覇権—』お茶の水書房
- 塚瀬進(2004)『満洲の日本人』、吉川弘文館

❖ 투고일 : 2014.11.25

❖ 심사완료일 : 2015.02.09

❖ 게재확정일 : 2015.02.09

Abstract

『満洲補充読本』と満洲児童文学の誕生
—最近の石森延男研究をめぐって—

磯田一雄

現代では国語教育と児童文学とは密接な関係にあると見られているが、石森延男は国語教育と児童文学とのギャップを埋め、双方を近づけるのに大きな役割を果たしている。石森が国語教育者であると同時に児童文学者にもなったのは、1926年に満洲(厳密に言えば関東州)の大連で在満日本人小学生たちのための国語補充教科書『満洲補充読本』の編纂に従事することになって以来である。彼は正味13年間の大連在住中に、精神的に創作活動をすると同時に、仲間を糾合して満洲児童文学運動のカリスマ的リーダーとなった。1939年に帰国すると彼は国定国語教科書の編纂に従事すると同時に、長編満洲児童文学を次々と発表する。こうした仕事は彼の戦後の国語教育や児童文学活動にもつながっている。

石森の満洲児童文学は満洲(中国東北部)の大地に基づきながらも、主として在満日本人の生活を中心にヒューマニスチックな温かいタッチで描いている。しかし圧倒的多数の(当時満人と呼ばれた)中国人はあまり登場せず、また彼等を見つめ、その生活を写生風に描いても、その社会的背景を掘り下げようとはしていない。それは石森が唱える『満洲郷土論』における植民地主義を認識し、克服していないためであるといえよう。この点をめぐって筆者と、三人の若い研究者の間で、膨大な石森の文学的遺産の中からそれぞれ異なった局面を取り上げて論評しているが、そこには期せずしてある協働作業が行われていたかのように見える。このような協働の今後の可能性と発展に期待したい。

Key Words : 満洲補充読本、現地適応主義、植民地性、人間性(ヒューマニズム)、満洲郷土論

Abstract

Manshu Hojutokuhon(Manchurian Sub-reader) and the
 Birth of Manchurian Children's Literature
 –Concerning Recent Studies on Ishimori Nobuo

Isoda, Kazuo

Today it is generally expected in Japan that *Kokugo Kyoiku* (Japanese language education, esp. in elementary school) and children's literature be closely related. In this sense, Ishimori Nobuo (1897–1987) contributed greatly to bridging the gap between Japanese language education and children's literature and brought both sides closer to each other. He became a Japanese-language educator as well as a children's literature writer while he was engaged in compilation of *Manshu Hojutokuhon* (Manchurian Sub-reader), the Japanese-language supplementary textbook for Japanese elementary schoolchildren residing in Manchuria, including Guandong (関東州). During his stay in Dalian for 13 years, he wrote many great stories for children and published children's magazines energetically, all while organizing those teachers who were devoted to writing children's stories, thus becoming a charismatic leader of the Manchurian children's literature movement.

In 1939 he was called back to Tokyo by the Ministry of Education to engage in the compilation of a new elementary Japanese language textbook, and at the same time he published voluminous works of Manchurian children's literature, one after another. After WWII he energetically continued both of his activities—those of Japanese language educator and children's story writer—although there remained no more tint of Manchuria.

While Ishimori's Manchurian children's literature is based on the area of Manchuria (northeast China), it is mainly centered on the lives of Japanese residents in Manchuria, written with a warm and humane touch. However, the Chinese people (generally called Manjin), who were the overwhelming majority there, seldom appear in his works, and even if he talks about them, he gazes

at them and draws their lives on the surface in the style of sketching, daring not to delve into their social background. It can be said that this is because of the unconquerable colonialism in the Manshu Kyodoron (Manchuria hometown theory), which Ishimori advocated. Recently, three young researchers have taken up and discussed some aspects of Ishimori's huge literary legacy, and it is clear that a certain "collaboration" has unexpectedly been carried out between this writer and those three young researchers involving this point. This writer sincerely looks forward to the future possibility and further development of such collaboration.

Key Words : Manchurian Sub-reader, local adaptability, colonialism, Manchuria hometown theory, humanism